

アメリカの音楽教科書“Share the Music”における 音楽構成要素の学習について

難 波 正 明

(教育学科)

はじめに

本稿は、アメリカの音楽教科書“Share the Music”（1995年版）¹において、音楽を構成する要素やその概念がどのように扱われているか、そしてその学習が各単元を通していかに展開されるべく組織化されているのかを明らかにする。

2008年、我が国では小学校と中学校の新学習指導要領が告示されたが、音楽科については「共通事項」の新設が目すべき改訂点の一つとなっている²。この「共通事項」は、「表現」と「鑑賞」という二つの学習領域に、従来は個別に盛り込まれていた音色やリズム、音の重なりなどの「音楽を形づくっている要素」、そして音楽にかかわる用語や記号をまとめて示したもので、表現と鑑賞の活動に共通の基盤として位置づけられている。

小学校については「音楽を形づくっている要素」は「音楽を特徴付けている要素」と「音楽の仕組み」に分けて示されており、前者として「音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズ、音の重なり、音階や調、和声の響き」が、後者として「反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係」が挙げられている。これに対して中学校では「音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成」が「音楽を形づくっている要素」とされている。

いずれにせよ、「共通事項」に示されたこれらの要素、あるいは音楽にかかわる用語や記号は、それだけを取り出して扱うのではなく、あくまで表現や鑑賞の活動の中でその働きや意味を理解するよう指導していくものとされている。

では、実際にはどのようにして「共通事項」

に挙げられた音楽の要素や用語、記号を、音楽活動に関連づけて指導していけばよいのであろうか。

今回の改訂で、小学校、中学校ともに表現の内容が「歌唱の活動」、「器楽の活動」、「音楽づくり（創作）の活動」に区分された形で明示され、また鑑賞の内容では「楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表す」（小学校）、「音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明する」さらには「根拠を持って批評する」（中学校）と「言語活動の充実」を反映した文言が加えられた。

これは小学校から中学校までを見据えて連続した系統的な学習がはかられることを意図したものと考えられる。とすれば、「共通事項」についても、その時々音楽活動に関連づけて指導していくとともに、その系統的な学習の展開を考える必要があるだろう。

“Share the Music”では、音色や強弱といった直接的、感覚的に把握される要素から、テクスチュアや構造といったより組織的、全体的な音楽の要素を、各学年を通して段階的、系統的に学習できるようにするための明確なプログラムが示されており、上記の問題を考える上で有用な示唆を与えてくれると思われる。

I. 音楽教科書“Share the Music”の全体的な特色と構成

“Share the Music”（1995年版）は、K-6の7巻からなるシリーズとして刊行された。教科書（生徒用、教師用）の他、コンパクト・ディ

スク、MIDIによる音楽のマニュアルとディスク、指導用ビデオなどの補助教材を通して、生徒をさまざまな形で音楽学習にかかわらせることができる。

教科書では世界のさまざまな国や民族の音楽から教材が選ばれており、さらに音楽以外の芸術、文化、風俗などもあわせて紹介されている。その多文化的な視点はより真正な内容を目指しており、例えば韓国の歌や台湾の歌など、その多くで原語の歌詞がそのままのせられており、これに発音記号と英語の訳詞がつけられている。

日本の歌も、「かえるのうた」、「かごめかごめ」、「うみ」、「つき」、「さくら」、「ゆき」など十数曲が掲載されており、ひらかなの歌詞やその発音記号が記されている。ただし、リズムや旋律が部分的に変わっていたり、童謡などが民謡と表記されるなど正確ではない点もあるが、これらの歌に関連して日本の花見や雪祭り、俳句などにも触れられており、音楽をその背景や脈絡とともに取り上げてより包括的な多文化的理解を導こうとしている。

また、他教科との横断的・統合的学習への展開可能性を示唆していることも、この教科書の特色である。教師用の版には、いくつかのLesson（授業）の後に、across the curriculumとして国語や算数、理科、社会などの教科へ生徒たちの学習を発展させていく具体例が挙げられている。

各学年は6つのUnit（単元）から成り、1単元は9回のLesson（授業）で構成されている。LessonはCore LessonとNon-Core Lessonに分かれ、Core Lessonで新しく出てくる学習内容をNon-Core Lessonでより確かに定着させ強化する。Core LessonはLesson 1, 2, 4, 5（第6学年のみLesson 1～8）で、残りのLesson 3, 6, 7, 8がNon-Core Lesson、最後のLesson 9はそのUnit全体の復習と評価にあてられている。

教科書ではその他に任意の学習内容として、各Unitの後に、その学習を発展させたり、著名な音楽家のインタビューをCDで聞いたりするEncoreが見開き1ページ続く。さらに、6つのUnitの後に、季節の歌や祝日の歌などを集めた

Celebrationsと、任意の教材として選ぶことのできる歌や鑑賞曲、ミュージカルの中の楽曲などを集めたMusic Libraryが加えられている。

Ⅱ. “Share the Music”における学習内容の系統化

この教科書の各Unitはそれぞれテーマを持ち、その中の各Lessonにもタイトルがつけられている。例えば、第3学年の6つのUnitは、それぞれ「1. みんなでゲームを」、「2. いろいろな場所に行く」、「3. 毎日、音楽」、「4. 歌う言葉」、「5. 働く、遊ぶ、そして歌う!」、「6. どんなニュース?」というテーマである。さらにこのうちUnit 2の「いろいろな場所に行く」について見てみると、その中のLessonは第1回から順に「旅の途中」、「音楽のデザイン」、「列車で旅をする」、「旅するリズム」、「旋律を上へ、上へ、もっと上へ」、「月の音色」、「旅の音」、「あなたの旅を描こう」、「帰り道」、そしてEncoreに「ハープはいろいろな所に」とタイトルがつけられている。

このようにテーマやタイトルを見ると、生活経験的なまとまりによって単元が構成され、そのつながりやひろがりによって学習が展開されていくようにも捉えることができよう。しかし、各Unitの最初には、強弱やリズムなど音楽を構成する要素の概念についての学習と、歌うこと、演奏することなどの音楽技能の学習がそのUnitの8回までのLessonでどのように展開されていくのかを見通すことのできるプログラムが提示されている。すなわち、要素や技能についての系統的なカリキュラムによって支えられているのである。

このうちまず技能について見てみると、「歌う」、「演奏する」、「動く」、「即興的に表現する・つくる」の4つの項目が「創造とパフォーマンス」という括りで、「読む」と「書く」の2項目が「楽譜」という括りで、最後に「知覚と分析」として「聴く・表す・分析する」という項目が示されている。

興味深いのは、「歌う」、「演奏する」、「即興・つくる」に加えて「動く」という項目が独立し

で設けられていることである。この教科書では、生徒たちが動きや筋運動感覚を使って音楽学習を進めていくことを重視しており、体系的に動きの技能を高めることができるよう、空間的な高さや範囲、移動する動きやその場での動き、グループでのフォーメーションなどさまざまな身体運動のパターンが具体的に示されている。

これはダルクローズやオルフ、コダーイなどのメソッドがこの教科書に大きく反映していることのあらわれであろう。実際、「歌う」、「演奏する」といった活動にもオルフ楽器が多用されたり、唱え言葉のリズムやオスティナート、ハンド・サイン、内的聴取といった手法が導入されている。

また、「聴く・表す・分析する」技能を高めるため、楽曲の展開や構成を聴覚だけでなく視覚的にもたどっていきけるListening Mapが掲載されている。このListening Mapという工夫は他の教科書にも用いられているようだが、“Share the Music”のそれには楽曲の理解や分析に役立つさまざまなアイデアが盛り込まれている。

これら音楽の技能を系統的に学習させるために、この教科書で用いられているさまざまな手法や工夫は非常に興味深いが、そのより具体的な詳細については稿を改めたい。

音楽的要素	概念
表現的特質	強弱
	テンポ
	アーティキュレーション (第2学年から)
音色	声／器楽の音色
持続	拍／拍子
	リズム
ピッチ	旋律
	和声(第3学年から)
	調性 長調／短調 (第3学年から)
構成	テクスチャ
	形式／構造
文化的脈絡	様式／背景

【表1】

さて、一方で音楽を構成する要素、そしてその概念について見てみると、まず「音楽的要素」として「表現的特質」、「音色」、「持続」、「ピッチ」、「構成」、そして「文化的脈絡」の6つが示されている。そして、一般に音楽の要素と捉えられるリズムや旋律はこの6つの「音楽的要素」のもとに概念として挙げられている(表1)。

こうした音楽的要素と概念の捉え方は、我々が一般に要素として捉えているリズムや旋律を自明のものとして考えるのではなく、個々人の音楽学習の中ではじめて概念として形成されていくという考えに立ったものと理解することができる。

教科書(教師用)の最後に、これら音楽的要素と概念の系統的な学習の展開がまとめられているが、そこで概念が学習され、定着していく過程が示されている。すなわち、まず準備の段階として、(1)視覚、聴覚、筋運動感覚などあらゆる知覚形態で概念を「経験する」が、まだ名称をつけて分類したり、意識的な注意を向けたりはしない、(2)名称化はまだせず、概念を「模倣し探求する」ことで、徐々にその理解に向かい、最後に理解に至る、(3)生徒自身の言葉や身振り、絵などで概念を「表す」ことで、その特性を明らかにする、という過程がある。

この準備段階を経て、概念をその「名称で分類し確認する」段階に移る。そして、応用の段階として(1)知っている教材で名称を用いて概念を「実践し」、(2)新しい教材で名称を用いて概念を「強化する」、(3)意識的に概念を用いて、楽譜その他の視覚的な表示物を「読み、解釈する」、(4)概念についての理解を意識的に応用して「つくる」、(5)さらに新たな教材で概念についての理解を「保持する」のである。

すなわち子どもは音楽を構成する要素についてはじめから概念的に学習するのではなく、音楽学習や活動の中で経験的にリズムや旋律といった概念を形成していき、自己に定着させていくのである。次節において、その過程を第1学年から第6学年まで具体的にたどっていきたい。

Ⅲ. 音楽的要素と概念の学習過程

【表現的特質】

〔強弱〕

第1学年では、もっぱら「強い (loud)」 「弱い (soft)」という区別で扱われる。その違いを名前の呼び合いや歌あそび、ボディ・パーカッションや楽器の演奏などさまざまな活動の中で表現する。また聴いている楽曲の強弱の変化を、身体の動きや教科書に示されたloud, softのしるしを指さすことなどで理解させる。第2学年で、これらがピアノ、フォルテという言葉、そしてpとfという記号に置き換えられる。「パレードが近づいてくる／遠ざかっていく」といった対比からクレシェンドとデクレシェンドも導入される。第3学年ではさらに強弱の幅が広がり、pppからfffまで、そしてmpとmfが提示され、強弱にさまざまな度合いがあることが学ばれる。第4学年では、強弱の幅や度合いを、強弱の変化や対比として捉えて、それが音楽の表現にどのようなかわるかが探求される。第5学年ではアクセント記号を加えて、第6学年まででそれぞれの楽曲にふさわしい強弱の表現をさまざまな教材を通して学習していく。

〔テンポ〕

テンポも強弱と同様、はじめは「速い」と「遅い」という区別で扱われ、音楽活動や身体の動き、語り方の中でこの違いが経験される。第2学年では、さまざまなテンポの音楽を歌ったり、聴いたりする中で、あるいはさまざまなテンポに合わせて運動したりする中で、テンポが拍と結びつけられる。第3学年からは、テンポの違いに加えてフェルマータ記号の意味やテンポの変化としてアッチェレランドとリタルダンドが学ばれ、第4学年ではアダージョ、モデラート、アレグロ、プレスト、第5学年ではアンダンテ、アレグロ・モルトといった楽語でテンポの違いが表されるようになる。そして、第6学年で引き続きそうしたさまざまなテンポの楽曲を歌ったり聴いたりした上で、楽曲にふさわしいテンポについて考え、選択できるようにする。

〔アーティキュレーション〕

アーティキュレーションに意識的な焦点が当てられるのは、第3学年の後半からである。同じ歌をマルカート、スタッカート、レガートで歌ったり、アルコ、ピチカートなどの奏法に注目しながらヴァイオリンの楽曲を聴いてアーティキュレーションが音楽に与える表現を学ぶ。第4学年ではスタッカート・アクセントによるジャズのスキヤット、キーボードでのトレモロやグリッサンドを経験し、第5学年、第6学年で楽曲にふさわしいアーティキュレーションについて考え、選択できるようにする。

【音色】

〔声や楽器の音色〕

第1学年では、主に声の音色、そしてギロやマラカスなどの音程のない楽器の音色が取り上げられる。声については「歌う」、「話す」、「ささやく」、「呼びかける」という4種類の声の働きに着目させたり、一人で歌う場合とグループで歌う場合の違いなどが扱われる。第2学年では、声域による音色の違いを話し言葉や歌で経験したり、話し言葉によるオスティナートをつくる活動などを行う。楽器は音程のない楽器を中心にして、伴奏をつけたり、それらの楽器の音色を比較・分類する。第3学年からは弦楽器や金管楽器、木管楽器など音程のある楽器を中心にさまざまな音色を経験する。また、大人の声と子どもの声、ファルセット、特定の民族に独自の歌い方など、歌声の変化や多様性が学ばれる。第5学年までは西洋以外の楽器も含めて一つひとつの楽器の音色、あるいは四重奏、五重奏などの組み合わせによる音色が対象となっているが、第6学年では編成の大きいバンドやオーケストラの音色が取り上げられる。

【音の長さ】

〔拍／拍子〕

第1学年では、唱え言葉や音楽の拍を手で打ったり、身体の動きで表したりして一定の拍を経験した後、さまざまな音楽で一定の拍の有無を区別する。さらに、2拍のまとまりと3拍

のまとまりで、強拍と弱拍が学ばれる。第2学年では引き続き、拍を楽曲に合わせて打ったり手拍子したりして安定した拍を定着させた後、拍を分割するリズムを学ぶ。4分音符を1拍として8分音符2つに分割する均等な分割と、付点4分音符を1拍として4分音符と8分音符に分割する均等でない分割が学ばれる。第3学年からは4分音符を1拍とした2拍子、3拍子、4拍子が、さらには付点4分音符を1拍とした2拍子、すなわち8分の6拍子を取り上げられる。拍子記号は♩や♩♩というように単位となる拍を音符で示したものが使われるが、第4学年から第5学年でこれを徐々に♩や♩♩という形の表記に置き換えていき、第6学年までにこれらの拍子をさまざまなリズム・パターンの中で習得させる。

【リズム】

第1学年では、「長い音」と「短い音」を区別することからはじまり、1拍に対して1音、2音のリズム・パターンとして4分音符と8分音符を唱え言葉や歌を通して学ぶ。第2学年ではさらに拍との関係を意識したりリズムの学習が行われ、2分音符と4分休符も学ばれる。第3学年では1拍に対して4音のリズム・パターンとして16分音符を取り上げられるが、4分音符や8分音符と同様に唱え言葉が学習に多く用いられる。また、拍子とのかかわりの中で付点のリズム（8分の6拍子の中で付点4分音符、4分の3拍子の中で付点2分音符）が学ばれる。第4学年から第6学年でこれらの音符やリズム・パターンが繰り返して学習される他、タイを使ったシンコペーションや16分音符と8分音符の組み合わせによるさまざまなリズム・パターンが取り上げられ、休符では8分休符、2分休符、全音符が学ばれる。

【音高】

【旋律】

第1学年では、音を「高い」「低い」で区別する学習からはじまる。空高く飛ぶ鳥と地面を歩く動物、ピッコロとチューバの音の対比などで

音の高低感を身につけさせた後、移動ドでの階名が学ばれる。はじめはmi, so, laの3音だけが取り上げられ、それらの音でつくられる旋律の輪郭（音の上下行）に注目させる。階名は学年が上がるにしたがってdoとre（第2学年）、高いdo'とre'（第3学年）、faとti（第4学年）が加わっていく。第2学年では、音の高低を音高（ピッチ）の違いとして捉え、それを五線での位置やボディ・サイン（ハンド・サイン）などで確認する。第3学年から第4学年にかけて、旋律の中で音が順次進行や跳躍進行で上行・下行したり同じ音を繰り返すことで旋律の輪郭や形をつくること、そして旋律をフレーズのまとまりとして捉えることなどを中心に学習が進んでいく。第5学年では調や音階とのかかわりの中で旋律が学習され、変化音を用いた旋律やブルー・ノートによる旋律も取り上げられる。第6学年ではト音譜表に書かれた旋律だけでなくヘ音譜表で書かれた旋律の読み取りも行われる。

【和声】

和声の学習は第3学年からはじめられる。まず、トニックとドミナントの2つの和音、そしてこれにサブドミナントを加えた3つの和音による歌が経験され、これにオルフ楽器やキーボードによる伴奏やバス声部の伴奏がつけられる。第4学年からは、対旋律や旋律オスティナート、2声部、3声部の歌が取り上げられ、I-V、I-IV-Vの和声進行について、それぞれの根音や和音の構成、コード・ネームなどが学習される。第5学年ではこれらの和音の結びつきとして、共通音や和音の進行、根音の進行などが学ばれ、ギターによる和音伴奏が任意の学習として導入される。第6学年では、harmonyという言葉の意味を話し合ったり、音楽に和声がある場合とない場合の違いなどについて考える。また、和音の転回についても学ばれる。

【調性】

この教科書では移動ドで階名を読んだり歌ったりさせているが、調性の学習は第3学年でdoとlaの音に注目させることから始まる。へ長

調の教材が多く、その他にも二短調、ト長調、ホ短調などでそれぞれ移動するdo（あるいはla）の音から全音階やペントニックの五線上の位置が示される。ボディ・サイン（doはひざ、soは肩など）やハンド・サインも用いられる。「ペントニック」、そして主音（tonal centerあるいはhome toneという語が用いられている）といった用語について説明が加えられている。第4学年では、移動ドの階名が調によって変わること、そしてヘ長調とニ長調について調号の記し方が説明される。また長調と短調について、旋律を比べたり、具体的にヘ長調とニ短調の音階を例に学習させる。

第5学年では、F音、G音、C音を主音とするペントニックの学習から、これにfa、そしてtiの音を加えた全音階の学習へと進み、長音階と短音階の仕組みが取り上げられる。半音と全音の構成が学ばれ、短音階についてはホ短調を例に調号と音程の関係が説明される。調号と臨時記号としてのシャープ、フラットが区別され、ブルー・ノートの変化音が学ばれる。第6学年では、これらに加えて調号の読み方・書き方（シャープ、フラットの加わる順番など）が学習される。

【構成】

〔テクスチュア〕

第1学年では、ボディ・パーカッションや音程のない楽器、音程のある楽器などによる伴奏をつけて歌う経験からはじめる。第2学年から第3学年では「オスティナート」という用語が説明され、唱え言葉のオスティナートやリズム・オスティナート、楽器によるオスティナートなどが歌に加えられる。ソロとグループによる唱え言葉。また、カノン（唱え言葉、二部輪唱）についても第3学年で説明される。第4学年ではリズムや音色などを変えていろいろな伴奏を工夫する。第5学年ではテクスチュアという用語が説明される。オスティナートやカノンの他に、ディスカントやカウンター・メロディ、パートナー・ソングなど二つ以上の旋律を重ねる経験をした後、二声部、三声部の和声的な重

唱を学習する。またI－IV－Vの和音を使って伴奏をつくることも行われる。第6学年になるとモノフォニー、ポリフォニー、ホモフォニーの違いという点からテクスチュアが説明される。また、（決められたリズムや音を選んで）伴奏やカウンター・メロディを自分でつくる。

〔形式／構造〕

第1学年では、唱え言葉や旋律のフレーズを一つのまとまりとして捉えることから始まり、次第にA－Bの二つの部分からなる唱え言葉や旋律が取り上げられ、第2学年では音楽における部分と全体、形式といったことをさまざまなAB形式の教材で学んでいく。そして、Aの部分が循環するロンド形式の学習に進んでいく。第3学年では、Bの部分が同じ歌詞で繰り返されるリフレイン形式の歌が多く取り上げられる。第4学年では、音楽的なまとまりとしてのフレーズという用語が説明され、それが反復と対比、問いと答えなどの形をとって一つの形式をつくるのが学習される。第5学年では、さらに音楽を形づくる仕組みについて、フレーズの他に楽節、モティーフといった用語を含めて学ばれる。第6学年では、リフレイン形式の歌やABA形式の楽曲についての学習を反復と対比（調や拍子の変化など）という点からより深めていくとともに、行進曲、ロンド、フーガ、ソナタといった楽種が取り上げられる。

【文化的脈絡】

〔様式／背景〕

教科書の中で任意の教材を集めたCelebrationとMusic Libraryを除いたUnit 1から6までで、取り上げられている楽曲を学年ごとにまとめると次のようになる（表2）。①はアフリカの音楽、あるいはアフリカ系アメリカ人による音楽、②はアジアの音楽、あるいはアジア系アメリカ人による音楽、③はヨーロッパの音楽、あるいはヨーロッパ系アメリカ人による音楽、④は中南米の音楽、あるいはスペイン系アメリカ人による音楽、そして⑤はアメリカ先住民の音楽である。

	①	②	③	④	⑤
第1学年	17	4	43	9	2
第2学年	16	7	52	5	3
第3学年	15	6	42	6	4
第4学年	19	8	46	5	6
第5学年	27	10	47	12	5
第6学年	15	8	68	4	3

【表2】

このように教科書では最初の学年から広く世界のさまざまな地域や民族の音楽から教材を選んでいる。そして、各Unitには音楽以外にも絵画や建築物、詩や物語などが豊富に盛り込まれており、子どもの多文化的な学習をより包括的に導こうとしている。

以上、強弱、テンポ、アーティキュレーション、声／楽器の音色、拍／拍子、リズム、旋律、和声、調性、テクスチュア、形式／構造、様式／背景という音楽的要素の概念が、各学年を通じてどのように取り上げられているのかを見てきた。それぞれの要素の概念がより具体的にどういった方法で学習されていくのかは稿をあらためて詳しく述べていきたいが、少なくとも各要素・概念についての学習内容を段階的、系統的に組織する、その一つのモデルをここに見出すことができる。

子どもたちは、個々の音楽構成要素について、その特徴や変化がわかりやすい楽曲を歌ったり聴いたりする中で、次第にそれを自分たちに身近な一般的な言葉や絵、身体の動きなどで識別していく。そして、そうした準備の段階を充分に経た上で、それぞれの要素についての概念的な定義や音楽上の用語法が学ばれていくのであ

る。

我が国の学習指導要領で今回新設された「共通事項」を取り上げるにあたって、この準備の段階をいかに組織していくかが重要な課題となるだろう。小学校の低学年では「音楽を特徴付けている要素」として「音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れとフレーズ」が、「音楽の仕組み」として「反復、問いと答え」がそれぞれ挙げられているが、これらをその時々音楽活動にあてはめて教えていくのではなく、子どもたちがこれらの内容について自発的に概念形成をはかれるようにするために、その準備段階としての音楽経験をどのように見通して計画していくかが問われるのである。

おわりに

本稿では、アメリカの音楽教科書“Share the Music”において音楽を構成する諸要素がどのように取り上げられているか概観し、そこから我が国の学習指導要領で新設された「共通事項」についての子どもたちのより主体的な理解を導いていくための示唆を得ることができた。“Share the Music”では、音楽構成要素についての概念を習得させるために、それを媒介する言葉や絵、身体の動きなどがさまざまに提示されていて興味深い。その具体的な内容については、今後さらに検討を加えていきたい。

注

1. Judy Bond, Marilyn Copeland Davidson, et al. “Share the Music” Teacher’s Edition 1～6, Macmillan / McGraw-Hill School Publishing Company, 1995
2. 文部科学省「小学校学習指導要領解説音楽編」（教育芸術社、2008、pp.19～22）及び「中学校学習指導要領解説音楽編」（教育芸術社、2008、pp.24～27）